

まえがき

急激な生物個体数の減少や絶滅といった危機が認識され、国際的には「生物多様性条約（以下、CBD）」、国内的には「生物多様性国家戦略（以下、国家戦略）」および「生物多様性地域戦略（以下、地域戦略）」の整備が進められてきた。また、「持続可能な開発目標（SDGs）」も定められ、「陸の豊かさ」、「海の豊かさ」、「安全な水」、「安定した気候」といった“自然資本”がすべての目標を支える基盤であり、それらの保全は、すべての者が活動目標に組み込んでいかななくてはならない」と言われてきている。国際的、国家的には、こうした様々な枠組みがつくられてきているにもかかわらず、現実的には、生態系の劣化や生物多様性の損失が止められ、回復に向かっていくという明るい話題はほとんど聞こえてこない。なぜなのか。それは、多くの地域社会では、それらが遠いところの出来事であって、自分たちの暮らしとは直接的には関係ないのだと考えられてきていることによるのだろう。そのような中でも、一部の地域では、関係者が協働のプラットフォームをつくり、知恵を出し合って地域の自然をうまく活かし、そして保全しながら地域をよくしていくための活動を展開してきている。今、必要なのは、それら地域で行われている活動を火種として、他地域に広げながら、大きな炎としていくことだ。地域での協働活動の推進には、経済的に地域の発展に寄与できるのかといった観点や、地域への愛着や活動そのものの楽しさ、将来世代への責任感といった価値観も大きく影響しており、単純ではない。様々な主体を巻き込む形で自然資本管理を進めていくに必要な目標設定のあり方、多様で多元的な主体間の合意形成の進め方、そのために準備すべきプラットフォーム、そして、マネジメントなどのあり方を、地域の個性に応じて考えていけるようにしていかなければならない。それを支援するツールキットがあれば、活動の水平展開にもつながることになるだろう。

本書は、地域に入り込んで研究や実践活動を行ってきた研究者・専門家プロジェクトチームを組織し、それぞれが持つ経験知を広く社会と共有するために編まれた。まず、地域での活動のインセンティブ（行動を促進するための仕組みや手段）、同じ目標を持つ人・組織のネットワークの形成、そのネットワークによる自然資本の協働管理活動の創出、政策への落とし込みといった一連の流れを整

理し、ボトムアップによる「緩やかな環境自治」の創出プロセスを詳細に示す。次に、合意形成、ガバナンスの構築、政策形成などの過程の様々な場面で用いられ、個々人に蓄積されてきた経験知を抽出する。それらをパターン・ランゲージとしてとりまとめ、自然資本管理に関わる協働のプロセスをデザインし、マネジメントしていくためのツールキットとして提供する。

本書には、各々の地域の实情に沿った協働活動を進めていくためのヒントがちりばめられている。自然の保全をテーマに研究しながら地域の実践活動に貢献したいと考えている研究者や専門家、NPOや市民団体で活動を実践している人たち、生態学者と組んで仕事をしたい市民のみなさん、まちづくりのプランナーや技術者、自治体の職員の方々に手にとってもらって、参考にさせていただきたい。

本書の構成と使い方

本書は、「第1部 自然資本の協働管理の必要性と先進地域からの学び方」、「第2部 暮らしの中で自然を賢く利用するための協働のプロセス」、「第3部 地域の自然を守り活かす取り組みを実践していくために」の3部11章で構成されている。

第1部では、本書の導入として、自然資本の自律的な協働管理を進めていくために考えるべきこと(第1章)、「実践としての超学際」という考え方に基づく社会変革の理論(第2章)、パターン・ランゲージの説明とつくり方(第3章)が示される。第2部では、沖縄県恩納村での生産者・加工業者・流通業者の連携によるモズク生産地としてのサンゴ礁再生(第4章)、新潟県佐渡市でのトキを守り増やすための環境保全型農業の展開(第5章)、京都市宝が池の森での都市に残存する里山を保全するための人のネットワークの拡大と活動の展開(第6章)、広島県北広島町での地域の風土に基づく草原や里山の再生・保全活動の創出プロセス(第7章)、沖縄県金武町での観光資源としてのマングローブ林の保全を進めるためのコミュニケーション(第8章)、徳島県での民学官の協働による生物多様性地域戦略策定の合意形成プロセス(第9章)について詳述される。

第3部では、「地域に入り込んで研究や協働活動を行っている景観生態学者は地域の景観や地域をどのように見ているのか」という問いへの応えとして、景観生態学研究者が持つ“観点の曼荼羅”が示される(第10章)。そして、地域に入り込んで研究や実践活動を行ってきた研究者・専門家が蓄積してきた、協働の

活動を動かしていくための経験知をパターン・ランゲージとしてとりまとめ、自然資本管理に関わる協働のプロセスをデザインし、マネジメントしていくためのツールキットとして提供する（第11章）。

どのような順番で読んでいただいても構わないが、まずは第1章を読んでいただき、第2部を読む前には第2章を、第3部を読む前には第3章を読んでおくことをおすすめする。第3部で解説される個々のパターンは、第2部で描きだされる事例の中に描かれている出来事や抽出されている経験知と関連する内容も多いので、章間を行き来しながらその関連性を見出していいただければ、発見的な楽しみを得ながら読んでいただけるのではないかなと思う。そして、何よりも、第2部、第3部については自らが取り組んでいる、もしくは取り組もうとしている活動を頭に浮かべながら、その状況と対比させつつ読んでいただくことで新たな視座を得てもらえるならば、僕たちにとってこれほど嬉しいことはない。

この本に込めた僕たちの思いが自己満足に終わらず、様々な地域での活動の創出につなげていくとの目標が達成されるかどうかは読者の皆さん次第である。ぜひ、様々な場での活動の創出、発展に役立て、そして、新しい「知」と「技術」を蓄積していただきたい。

本書は、プロジェクトメンバーがそれぞれの地域の皆さんと信頼関係を構築しながら実践してきた成果のまとめである。僕たちを受け入れてくれて、話を聞かせてくれたり、僕たちの話を聞いてくれたり、また、楽しい酒盛りに招待してくれたり、そしてともに活動する仲間に加えてくれた地域の皆さんには感謝しかない。この本が、少しでも皆さんへの恩返しになればと思う。（公財）日本生命財団は、プロジェクトの推進と本を出版するための資金を提供してくれた。荒巻悠さんは、ほんとに素敵なイラストを描いてくれた。本のデザインは、吉田考宏さんと八田さつきさんにお引き受けいただいた。そして、共立出版の天田友理さんには、企画段階から出版に至るまでずっと寄りそっていただき、適切な助言と具体の指示をいただいた。僕たちの執筆が遅くて、さぞ気をもんだことだろう。天田さんがいなければ、本書は日の目を見ることはなかった。この本は、これら皆さんとの協働の賜である。

2025年2月
編者を代表して
鎌田磨人

目次

第 1 部

自然資本の協働管理の必要性和先進地域からの学び方 1

第 1 章

自然資本の自律的な協働管理を 進めるために 鎌田磨人 2

社会－生態システムとしての地球の危機 2

危機からの脱却に向けたグローバルな動き 3

日本における国や自治体の動き 5

地域社会でのボトムアップ活動の必要性 6

自律的なボトムアップ活動をマネジメントするための枠組み 8

他の地域でも使えるやり方を見つけるために 10

第 2 章

多様な主体による自然資本管理を進めるために ―「実践としての超学際」という考え方 ハイン・マレー・田村典江 17

学術と社会の「際（きわ）」を超えての問題解決 17

プラネタリー・バウンダリー 19

求められている持続可能な社会へのトランジション 21

自然の保全を目指す研究者・専門家へのメッセージ 23

第 3 章

パターン・ランゲージによる実践技術の共有 鎌田安里紗 28

パターン・ランゲージとは 28

パターン・ランゲージの作成方法	30
パターン・ランゲージを使うと何ができるのか	31
本書で提供するパターン・ランゲージ	33

第2部

暮らしの中で自然を賢く利用するための協働のプロセス 35

第4章

生産から消費までの流通全体で取り組む里海保全 ——モズク養殖とサンゴ保全【沖縄県恩納村】 大元鈴子 36

サンゴ礁が支える恩納村のモズク養殖	36
恩納村における海面利用ルールと赤土流出防止方策の構築プロセス	41
里海保全活動のモズクサプライチェーンへの拡大——加工会社との協働	46
第一次産業による生態系保全にサプライチェーン全体で参加する	48
漁協に研究者がいるということ	51

第5章

自然再生と地域活性 ——農業政策を変化させたトキ【新潟県佐渡市】 岩浅有記 59

トキの保護増殖から野生復帰へ	59
トキ保護の歴史	61
トキ認証米制度の創設プロセス	63
政策統合をもたらしたステークホルダー間のネットワーク	70
バウンダリー・オブジェクトとしてのトキ	73

第 6 章

多様な人々による都市の森の再生 【京都市宝が池の森】

鎌田磨人・丹羽英之・田村典江 80

多様な人々が集う場としての“宝が池の森” 80

宝が池の森の劣化と市民活動 81

宝が池の森での協働の展開プロセス 83

協働を支える人々の関わり 95

▶Column2 協働活動支援のタケコプター——ドローン 丹羽英之 100

第 7 章

里山再生のための順応的ガバナンスの技術 【広島県北広島町】

鎌田安里紗 103

北広島町での自然資本の管理と活用 103

自然資本管理を支えるマネジメントの経験則 110

経験則を順応的ガバナンスに活かす 121

第 8 章

自然資本としてのマングローブ林を
活用し続けるための仕組みづくり 【沖縄県金武町】

鎌田安里紗・鎌田磨人 126

自然資本としてのマングローブ林 126

マングローブ林の劣化に伴う金武町内の動き 128

マングローブ林の永続的活用と保全に向けた協働の創出プロセス 130

人のネットワークを広げて協働を創出していくための経験則 138

協働を促進するためのコミュニケーション技術 148

第 9 章

生物多様性地域戦略のつくり方
——合意形成プロセスのデザイン 【徳島県】

鎌田安里紗・鎌田磨人 151

生物多様性とくしま会議 151

協働の始まり——協力しあえるつながりをつくる 152

協働の展開―議論を深めながら市民・コミュニティの力を育む	155
継続的に活動が続く仕組みをつくる	163
戦略策定後の市民活動への接続	165
合意形成プロセスのデザインへの活用	167

第3部

地域の自然を守り活かす取り組みを実践していくために	169
---------------------------	-----

第10章	景観生態学者は活動を行う地域を どのように見ているのか	長井雅史	170
------	--------------------------------	------	-----

全体像 ― 観点の曼荼羅	172
景観生態学者が地域を見る際に用いる38の観点	174

第11章	地域によりそう自然資本管理の進め方	鎌田安里紗	189
------	-------------------	-------	-----

パターンの読み方	189
地域によりそいながら自然資本管理を進めるためのパターン・ランゲージ	191

おわりに	266
索引	269